

タイトル:クワイン以後のメタ存在論

倉田 剛(九州大学)
秋葉剛史(千葉大学)
小山 虎(大阪大学)
藤川直也(首都大学東京)

近年の分析形而上学における存在論研究は、しだいにメタレベルの考察にシフトしつつある (1*)。このことは、20 世紀後半に再興を果たしたとされる「現代存在論」が、ある成熟期に達したことを示していると言えよう。だが、存在論の方法をめぐる近年の議論は、多種多様な立場が相まみえ混沌の相を呈している。本ワークショップは、こうした「メタ存在論研究」の現状を整理するとともに、それを各提題者の視点から批判的に検討することを目的とする。

われわれは、主に「クワインの標準的メタ存在論 vs. 非クワイン的メタ存在論」および「存在論的实在論 vs. デフレ主義」という二つの対立軸を用いて昨今のメタ存在論的議論を整理し、それらについての検討を行うつもりである。

一つ目の対立軸は、クワインの方法と、それに懐疑的な諸立場 (虚構主義、マイノング主義など) との論争によって形成される (2*)。「クワインの方法」とは、存在論的コミットメントの基準 (「存在するとは変項の値であることである」) を核とする方法であり、それは次のような手続きとして理解される。

- (i) われわれの承認する理論を構成している文を標準的な論理式に翻訳せよ。
- (ii) その翻訳から存在論的コミットメントを取り出せ。
- (iii) その存在論的コミットメントを額面通りに受け入れよ。

手続き (i) に現れる「翻訳」とは、量化構造を明示した式への書き換えを意味する。典型的には、“ $\exists x(\dots)$ ” というかたちの式への書き換えを指すと考えてよい。(ii) の手続きは、量化構造をもつ式の変項の値を特定することを指す。(iii) は、そうして特定されたものが存在することを文字通りに受け入れよと述べる。これまで (i) に関する困難はしばしば指摘されてきた。なぜなら、素朴な翻訳は「望まれない存在論的コミットメント」を含意することがあるからだ。よく知られているように、クワイン主義者は「適切なパラフレーズ」を考案することで、こうした困難を回避しようとしてきた。(パラフレーズという手法自体は、クワインの標準的方法の一部である。) しかしながら、非クワイン的メタ存在論は上記の一連の手続き自体に異議を唱える。虚構主義者は、(i) および (ii) から (ii) へのステップを認めない。つまり虚構主義者は、われわれの承認する理論が対象 X にコミットすることを認めたとしても、X の存在を文字通りに信じる必要はないと説く。他方、マイノング主義者は、そもそも、(i) から (ii) へのステップを否定する。すなわちマイノング主義者によれば、量化と存在論的コミットメントとは「別物」だということになる。

二つ目の対立軸は、存在論的な論争が、有意味であり、かつ世界の構造に関する論争であると主張する立場と、それらの多くはトリヴィアルな仕方では答えることができる、あるいは

はたんに言葉づかいに関する論争にすぎないと主張する立場との対立を指す。前者は「存在論的实在論者」(T. サイダーなど)、後者は「デフレ主義者」または「新カルナップ主義者」(E. ハーシュなど) などと称されることが多い (3*)。メレオロジストと反メレオロジストとの論争を例にして、これを考えてみよう。

- (M) ミノルの鼻とエッフェル塔から成るものが存在する。
($\exists x(x$ はミノルの鼻から成る & x はエッフェル塔から成る))
- (A) ミノルの鼻とエッフェル塔から成るものは存在しない。
($\neg \exists x(x$ はミノルの鼻から成る & x はエッフェル塔から成る))

メレオロジストは、どんな二つの対象についてもそれらから成る複合的对象が存在すると考えるので、(M) は真だと主張する。ところが反メレオロジストは、二つの対象が一つの複合的对象を形成するためには、それらのあいだに何らかの実質的な関係が成立している必要があると考えるので、(A) が真だと主張する。デフレ主義者 (新カルナップ主義者) によれば、この論争は世界の構造に関するものではなく、「存在する」という言葉の意味に関する論争である。つまり、メレオロジストが用いる M 言語における存在量子と反メレオロジストが用いる A 言語における存在量子の意味が異なるがゆえに生じる論争だとされる (「量子変動」)。これに対し、存在論的实在論者は、存在論的論争が「真面目」なものであり、かつ世界の実在に関する論争であると反論する。むしろ实在論者といえども、「存在」は一義的ではなく多義的であることを容認することはできるが、彼らは世界の構造を忠実に記述するための最も基礎的な言語があると考え。ところが、デフレ主義者はそうした特権的言語の存在を認めない。

これらの他にも、存在論の中心的課題は「何かが存在するのか」ではなく、「何が基礎的な存在者であるのか」を問うことだと主張する grounding 理論と、従来の標準的メタ存在論との対立軸などを挙げることができよう。

本ワークショップでは、オーガナイザーである倉田がこの主題のもつ意義および錯綜した理論的状况を短く解説した後、藤川がメタ存在論としてのマイノング主義 (非存在主義) を、次いで小山が存在論的实在論とそのライバル理論を論じ、最後に秋葉が grounding 理論に関する最新の話題を提供する予定である。

(1*) メタ存在論 (メタ形而上学の一分野) に関する初の本格的な論文集は、D. Chalmers, D. Manley, R. Wasserman (eds.), *Metametaphysics: New Essays on the Foundations of Ontology*, Clarendon Press, 2009 である。また最近では、概説書・入門書のレベルにおいてもメタ存在論を主題とする著作が相次いで出版されている。F. Berto & M. Plebani, *Ontology and Metaontology: A Contemporary Guide*, Bloomsbury, 2015; T. E. Tahko, *An Introduction to Metametaphysics*, Cambridge University Press, 2015.

(2*) M. Kalderon (ed.), *Fictionalism in Metaphysics*, Oxford University Press, 2005; G. プリースト『存在しないものに向かって — 志向性の論理と形而上学』, 久木田水生・藤川直也訳, 勁草書房, 2011 年。

(3*) T. Sider, *Writing the Book of the World*, Oxford University Press, 2011; E. Hirsch, *Quantifier Variance and Realism*, Oxford University Press, 2011.